# そこにあるもの

仲峰　良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そこにあるもの

【Ｎコード】
Ｎ７０３１Ｇ

【作者名】
仲峰　良

【あらすじ】
産まれてすぐに母を亡くした私を育ててくれたのは父の恋人の瑞貴だった。私は普通とは違う環境で、それでも大切なものを学んだ。

私の人生は一言で言うなら「曲がりくねった道」らしい。

私を産んだ母は元々病弱で子供一人産むのも厳しいと医者に言われていたのにロクデナシの父と出会い、恋をし、そうして身篭った私を何が何でも産みたいとごねて、周りの反対を押し切って私を産んだ。

結果、母はそのまま亡くなった。

母方の祖父母は娘を溺愛していた為に、娘の命を奪った孫の私が憎かったので、私と一切の縁を切った。

なので、私は祖父母の顔すらも知らない。

そうして生まれてすぐに母を亡くした私は父に引き取られるわけだが、その父がとんでもないロクデナシで。

とりあえず、引き取ってみた。ぐらいの認識しかなかった男に赤ん坊の子供の面倒など見れるはずも無く。

私はその当時の父の恋人だった瑞貴に育てられた。

瑞貴は私の母とも何度か面識があり、私が母の事を訪ねると

「本当に篤弘と何処で知り合ったのか不思議なぐらいに綺麗でおしとやかなお嬢様だったのよ」

と言った。

当時から、父には瑞貴を含め三人の恋人が居る。

仕事も主に建築とか道路工事とかの所謂力仕事系。

「菜摘さんはいっつもお稽古事の帰りとかにこっそり会いに来てたみたいよ。私が何度か会った時にも着物姿だったり、ヴァイオリン

のケース持ってたりして、『ああ、住む世界が違うなぁ』って思ったもの」

「ねぇ、瑞貴はどうして父さんが好きなの？」

「・・・そうね。篤弘はあの自由気ままな所がとても魅力的なのよ。私も篤弘に会うまでは結構がんじがらめの生活だったもの。彼に会って、大袈裟に言えば世界が変わったって所かな？」

「ふぅん」

「お子様にはまだ早い話かもしれないわね」

私には父の良さが分からない。
けれど、父の恋人たちは父の事がとても好きで、とても大切にしていた。
瑞貴に至っては、私が父の子供だから、と言う理由で面倒を見てくれている。それは父の人徳なのだろうか？
あのロクデナシの何処にそんなに人を惹きつける物があると言うのだろう。まったく理解は出来ない。
瑞貴や父の恋人たちにそのことを言うと、「もっと大人になったらきっと分かるわ」と言われるのだが、本当にそんな日が来るのだろうか？と不思議に思ってしまう。
けれどきっと、死んだ母も父の魅力に惹きつけられた一人なのだろう。

＊

中学生になったある日、家に帰ったら瑞貴が居なくなっていた。
父は寝室で由香里さんと眠っていて、居間ではなずなが下着姿でテレビゲームに勤しんでいた。
「ねぇ、なずな。瑞貴は？」
「んー、瑞貴なら出てったよ」
「何で？」
「知らない。私には興味ないことだから」
そっか。と私は呟いて自室に向かった。
手短に着替えを済まし、財布を片手に商店街へ向う。今まで食事の支度は殆ど瑞貴がやっていてくれて、その瑞貴が居なくなったとなると今度は私がやるしかなくなる。
幸いにも瑞貴は私がいつでも自立できるようにと一般的な家事については一通り教えてくれていたので、特に困る事はない。
行きつけのスーパーで夕飯の献立を考えながら瑞貴の事を思う。
私より十九歳年上で、物心ついた時から私のお母さん代わりだった。由香里さんやなずなが私に何にも興味を示さなかった中で、ひとり瑞貴だけが私に興味を示し子供を産んだ事も育てた事も無かったのに四苦八苦しながら私の面倒を見てくれた。
「私はね、偽善かも知れないけど奈摘さんの事も気に入ってたから、だから貴方を育てる気になったんだと思う」
いつだったか、酔っ払った瑞貴が至極真面目な顔でそんな事を言った。

「まぁ、養育費も篤弘が殆ど出してたから金銭面では困らなかったし、貴方を育てるのはそれなりに楽しかったもの」

「でも、酔狂な事だよね」

「・・・あんた頭いいわね。小学生が酔狂なんて言葉中々使わないわよ。うん、でも酔狂でも何でも育てたかったから育てたの。赤ん坊の頃は大変だったな。私も流石に母乳は出ないし、準備も何にもしない内に赤ん坊の貴方が来たから大慌てで近所の大型薬局に車出して哺乳瓶に粉ミルクにおしめに涎掛けに産着とか、とりあえず赤ちゃん用品は全部揃えてさ。なずななんかはまだ学生だったから、『赤ん坊なんて面倒臭いよー。施設に入れようよー』って騒いでたわ。由香里さんは完全に興味なさそうだったし。でも私が育てたいって言ったら篤弘は何て言ったと思う？」

私には分からなかった。
父は病院で祖父母に罵られるだけ罵られて私を押し付けられたと聞いていたので、それを思えば私に対してあまり宜しくない感情を持っているような気もしたし。

「・・・わからない」

考えればどうしてもネガティブな方向へいく。
私が言えたのはそのたった一言だけ。

「ふふ。篤弘は私にこう言ったのよ。『難しいかもしれないけど、宜しく頼む』って」

「・・・完全に他力本願だ」

「そうね。でも、私はその一言で貴方の母親代わりになろうって決めたのよ」

「瑞貴は、代わりじゃないよ。私のお母さんだよ」

「あら、嬉しい。ありがとう」

瑞貴は本当に嬉しそうに笑って私の頭を撫でた。私はちょっと照れくさくて、でもその一言が言えて良かったと心底思っていた。
けれど、瑞貴は居なくなってしまった。
私に何の言葉も残さずに。
いつも一緒に来ていたせいか、一人で来たスーパーはどこか知らない場所のように思えた。

＊

「ねぇ、お父さん」

土曜日の午後。
父が珍しく一人で居た。居間のソファーに腰かけて他愛も無いテレビ番組を眺めていた。
私は居間に入る気にならず、居間の入り口で扉に寄りかかって口を開いた。

「ん？何だ？」

「瑞貴、何処行ったのかな？」

「さぁな。あいつも結構気まぐれだからな」

「そう。ねぇ、父さん」

「何だ？」

「お母さんの事好きだった？」

「ああ」

「そっか。ねぇ、いつになったらお母さんのお墓の場所教えてくれる？」

「・・・今はまだ教えられない」

「分かった」

特に期待はしていなかった。
瑞貴の事もそうだし、母のことについても父は大抵「教えられない」としか言った試しが無い。
父が母のことについて語らないのは其処に祖父母の意志があるからだと瑞貴が言った事がある。
祖父母は私に母の墓参りをして欲しくないらしい。
そして、墓場で私と会ってしまう事も避けたいらしい。

「悪いな」

「いいよ。・・・ちょっと出てくるね」

私と父の会話は親子としてはかなり素っ気無い会話にしかならない。父は私への接し方を、私は父への接し方が良く分からないのだ。仕方の無い事だとは思う。会話だって今まで間に瑞貴が居て成り立っていた部分が多い。

「篤弘も変な所が不器用なのよね。貴方はそんな所がお父さんそっくりよ」

私が父と接する姿を見た後、瑞貴は決まってそう言った。

＊

「加瀬ちゃんはさ、良く、ぐれ無かったよね」

瑞貴が居なくなって五年。
私は高校を卒業して就職した。勤め先は中小企業の受付対応窓口だ。電話も取るし、来客対応もする。
時々、他部署に援護に行く事もあれば、車を運転して誰かを送り届けたりする。
フットワーク軽いね、言われてそれなりに重宝がられている。
今日は同じ部署の先輩と飲みに来ていて、それなりに酔っ払った先輩が私の生い立ちを聞いてそんな事を言った。

「お母さんは生まれてすぐ亡くなっちゃって、お父さんには複数の恋人が居て、そんでもってそのうちの一人に面倒見てもらって、でもその人もある日行き成り居なくなって、そっから一人で家の事やりながらバイトして高校行って就職したんでしょ？他の人がやらなくて良い苦労とかをそんな若いうちからしてたなんて・・・私なら

理不尽過ぎて家出とかしちゃうな。きっと現実から逃げちゃうよ」

「でも、別に暴力とか振るわれたわけでも無いですし。まぁ、適当すぎた放任主義ってトコですかね？育ての母もいましたし、あの生活もそれなりに性に合ってたんで、特に辛いとか思った事は無いですけど」

「そっかー」

何故か先輩は納得行かない顔をしていた。

「それに、人って産まれたときからその環境で暮らしてると、それが普通と思うじゃないですか。順応力ってやつですよ」

「まぁ、そうだよね。でも、年頃の娘さんがいるのにお父さんはその後も恋人作ってたんでしょ？」

瑞貴が居なくなった三年後、今度は由香里さんが家を出て行った。父は新しい恋人を作った。

彼女は咲子さんと言って、私と五つしか違わなかった。

「加瀬ちゃんの家のことだからはっきり言って口出せる問題じゃないけど、でも、普通は娘のこと考えるでしょ？しかも、娘とそう対して歳の変わらない恋人ってどうなの？」

言うだけ言って、先輩は喉が渇いたのか、ジョッキに半分以上残っていたビールを一気に飲み干した。

私は店員を捕まえてビールのお代わりを注文した。

「でも、私は父のすることはもうどうでも良いと思ってるんですよ、

好き勝手やっても父が幸せで私に迷惑がかからなければそれで良いな。って。確かに父は『父親』としてはあんまり良くは無かったけど、それでも確かに努力はしていたと思いますし」

「でもさー、加瀬ちゃんは今でも一緒に暮らしてて家の事やってあげてるんでしょ？・・・正直どうなの？お父さんの恋人達と一緒って」

先輩が言葉を濁しながらも聞きたい事は大体分かっていた。
男女の関係の事。下世話な話はいつだって人を引き付ける。
けれど、私はどう答えたもんかな？と少し思案した。
父とその恋人たちのこと。
割と父とその恋人たちは、自由勝手気ままな人が多く、小学生だった私が側に居ても対して気にもせずひっついていた気がする。
夜中にトイレに起きて父の寝室から声が漏れ聞こえた事もあったし、女性陣が下着姿で家の中をうろつく事も少なくは無かった。
普通の子供であれば恥じたり居心地悪い思いをしたりするのだろうけれど、私は特に違和感も無く生活していた。
私にとっては日常とはそういうものだったからだ。

「中には、私に八つ当たりするような人も居ましたけど、全体的に良い人の方が多かったですよ？水商売してた人も居たけど、普通の事務とか販売員とかも居ましたし。洋服くれたり遊びに連れて行ってくれたり。歳の離れたお姉さんみたいなものでしたし」

「むぅー。そんなもんなのかー」

「そんなもんですよー」

タイミングのいい所でビールのお代わりが来たので、私は「さ、辛

気臭い話は此処までにして、飲みましょうよ」と先輩に言った。

＊

良く晴れた祝日の午後。
私は母の墓参りに来ていた。高校に入ってすぐに父は母のお墓を教えてくれた。

「今のお前なら、あの二人に会ったとしても大丈夫だろ」

そう言われて、父の不器用さを改めて感じた。それは、ひどく遠回りだった方法。

「・・・私のさ、不器用な所はお父さんに似てるって瑞貴に言われた事があるよ」

私は思わずそんな事を言っていた。

「そうか。でも言われてみたらそうかもしれないな」

父はこちらを見ずに答えた。

「本当にね」

私たちはきっと普通の父子の関係とは掛け離れていた。
家族と言う絆はあったかもしれないけれど、そこには普通の愛情があったわけじゃなかった。
でも、不器用な優しさは永い月日を経て届く事もある。

父はとても不器用な方法で、それでも私を守ってくれていたのだと思う。

「お父さんの不器用な所、お母さんは好きだった？」

私は母の墓標に花を手向けながら、聞いた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7031g/

そこにあるもの

2011年1月27日08時39分発行